



大震災から10年・交流の記憶⑨

いわきと双葉の患者さんのために いわきでがんばる接骨院

震災当時、矢口さんの自宅は福島第一原子力発電所からわずか3.5kmの位置にあり、避難指示後、東京に住む弟を頼ってすぐに転居した。2011年4月、都営住宅に引越すと同時に、知人の接骨院で妻と働くことになったが、その間にも地元患者から「先生、今、どこにいるの？ぎっくり腰になって困っている」などと電話がきていた。「施術したい気持ちはあっても、東京にいる自分にはなすすべもなく、何もできないのが辛かった。」

「下ばかり向いてはられない」と、2011年5月からは家の片付けに双葉に通い、6月には双葉と気候も距離も近いいわきで物件を探し始めた。そして築40年ほどの建物を改装し、2012年3月、妻の誕生日にいわきで再開。「がんばる接骨院いわき店」という店名は、当時よく耳にした「がんばろう福島」「がん

ばつべ東北」から、自分も頑張ろうという気持ちも込めて名付けた。

開院当時、患者がほとんど来なかったときに、避難中の双葉郡の患者も入居していた仮設住宅への無料送迎サービスを始めた。「若者のように携帯電話で連絡を取り合うことのできないお年寄りが、待合室で久々に友人と再会し、泣いて抱き合う場面に毎日遭遇した。出会える場所を作れてよかった」と矢口さんは語る。気持ちも沈んでいた一人暮らしの高齢者も多かったが、接骨院での施術と会話で元気になって帰る人も多くいた。

矢口さんの評判は、いわきでも次第に広がり、現在、ほとんどがいわきの患者になった。「近所の人も親切にしてくれて、みんな仲良しだよ」と話す矢口さん。地域にも自然と馴染み、カラスの被害に遭うことも多かった地域のゴミ集積場に自作のゴミ箱を設置すると、近所の人からとても喜ばれた。今では近所の人が遊びがてら治療に来るといふ。

「自分ができることはこの仕事を続けること。今後も患者さんへの施術を通して地域に貢献したい」と頑張っている。



がんばる接骨院 院長
矢口 守夫さん

浪江町出身。1980年双葉町で「矢口接骨院」を開院し、30年以上営業。震災後、東京に避難したのち、2012年3月に店名を「がんばる接骨院いわき店」と変えていわきで再開。現在は奥さんと長男、娘夫婦と一緒に施術を行っている。